

こもお
薦生遺跡（第2次）発掘調査 現地説明会資料
～名張市薦生～

令和4年8月6日

三重県埋蔵文化財センター

【平安時代末～鎌倉時代の遺構・遺物】

平安時代末～鎌倉時代の遺構は、柱穴や井戸などが見つかりました。

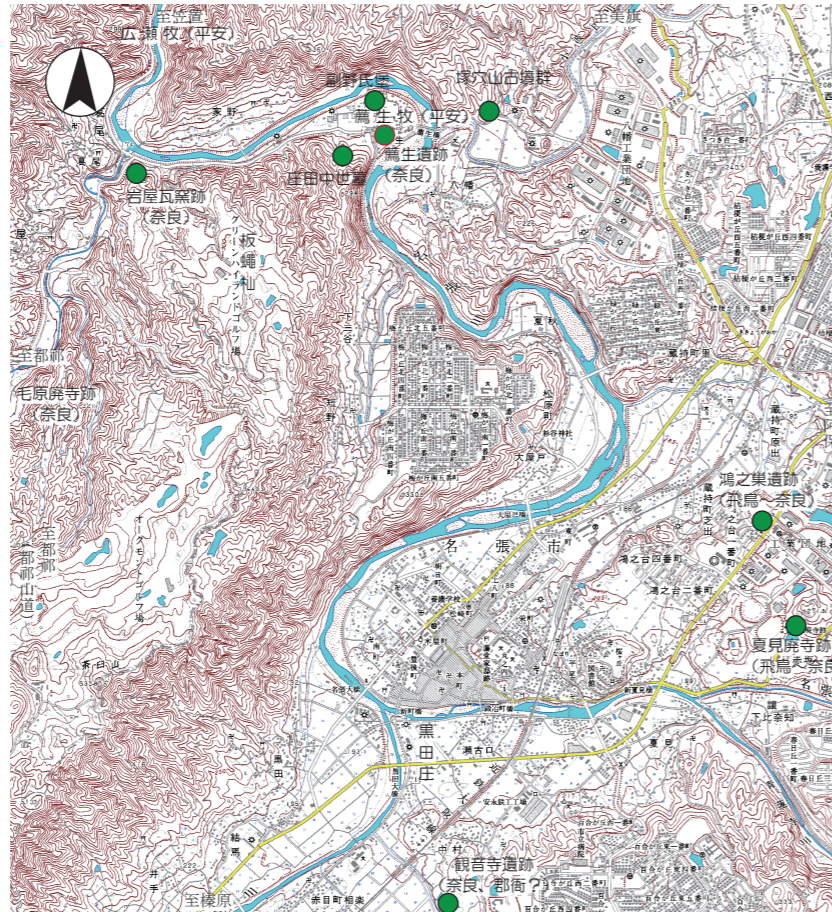
柱穴の1つから、瓦器碗がほぼ完全な形で出土しました。瓦器は、器の表面をいぶして炭素を吸着させたもので、伊賀地域で一般的に使われるものです。今回の調査では柱穴が並ばず柱列や建物にならなかったのですが、柱穴の数は比較的多く、調査区より北方に建物などがあったのではないかと考えられます。

また、3×2m程度の楕円形や隅丸方形をした穴を5基確認しました。

中には曲物を据えた跡がわかるものがあり、井戸であったと思われます。

第2次調査では、奈良時代の竪穴建物、平安時代末～鎌倉時代の柱穴や井戸などを確認しました。

特に奈良時代の竪穴建物は、第1次調査で出土した大型掘立柱建物と向きが揃うものの、古代の役所ではないかと考えられる大型掘立柱建物と性格を異とし、民衆の住まいであったとみられます。両者の距離がわずか14mしか離れていないため、奈良時代の中でも大型掘立柱建物が機能していた時期と竪穴建物が機能していた時期に細分されると考えられます。両者がどのように造られ、機能していたのかが、今後の課題となります。



薦生遺跡及びその周辺の遺跡
(国土地理院地図「名張」1:25,000 に加筆)



竪穴建物1～3（北東から）

たてあなたてももの
奈良時代の竪穴建物、鎌倉時代の井戸が見つかりました

薦生遺跡は、名張市の北西の名張川沿いの段丘上にある縄文時代から中世にかけての遺跡です。「薦生」の地名は、古代・中世の東大寺（奈良県）に関する古文書に、「薦生牧」（平安時代）、「薦生庄」（鎌倉時代）などが残されています。平安時代には東大寺領板蠅杣など大寺院の木材を伐りだす山林が付近にあり、これらの杣は名張盆地に黒田庄など東大寺の荘園を生み出しました。

昨年度の調査では、奈良時代（約1,300年前）・平安時代末から鎌倉時代（約700年前）の掘立柱建物などが見つかりました。奈良時代の掘立柱建物の中でも、東西10間（約30m）、南北2間以上（6m以上）の大きさが推定される建物1は「官衙」（古代の役所）に用いられる「長舎」という形式の建物で、注目されました。

今回は、昨年度調査区の東隣になりますが、昨年度のような奈良時代の大型の掘立柱建物は確認されず、奈良時代の竪穴建物や平安時代末から鎌倉時代の柱穴・井戸などが見つかりました。

調査遺跡名：薦生遺跡

原因事業名：上笠間八幡線道路改良事業

所在地：三重県名張市薦生

調査実施機関：三重県埋蔵文化財センター

調査面積：約1,550㎡

調査期間：令和4年5月31日～令和4年9月14日（予定）

【奈良時代の遺構・遺物】

奈良時代の遺構は、竪穴建物3棟を確認しました。

竪穴建物1の規模は東西3.2m×南北3.2mで、北側にカマドがありました。カマドは下の部分が残っており、板石を積んでいたようです。カマドの中央に煮炊き^{かめ}に使う甕を支えるための石^{しちゅうせき}も残っていました。手前は薪を入れる焚口^{たきぐち}部分が火を受けて、赤く変色しています。奥には煙を外へ出す煙道^{えんどう}の底の部分のみ確認できました。カマド付近から、土師器甕片^{はじき}が出土しました。

竪穴建物2の規模は東西3.6m×南北2.4m以上で、壁の補強及び排水の役割をもつ壁周溝^{へきしゅうこう}があります。また、中央付近は黒褐色の土と黄褐色の土が斑^{まだら}になっており、固くなっています^{はりゆか}（貼床）。

竪穴建物3の規模は東西4m×南北4m以上で、壁周溝や柱穴・貼床を確認しました。建物内東側に炭や焼土がみられます。竪穴建物1のカマドのような構造は認められませんが、そこで火を使っていたとみられます。建物から、土師器^{すえき}・須恵器が出土しました。



竪穴建物1（北から）



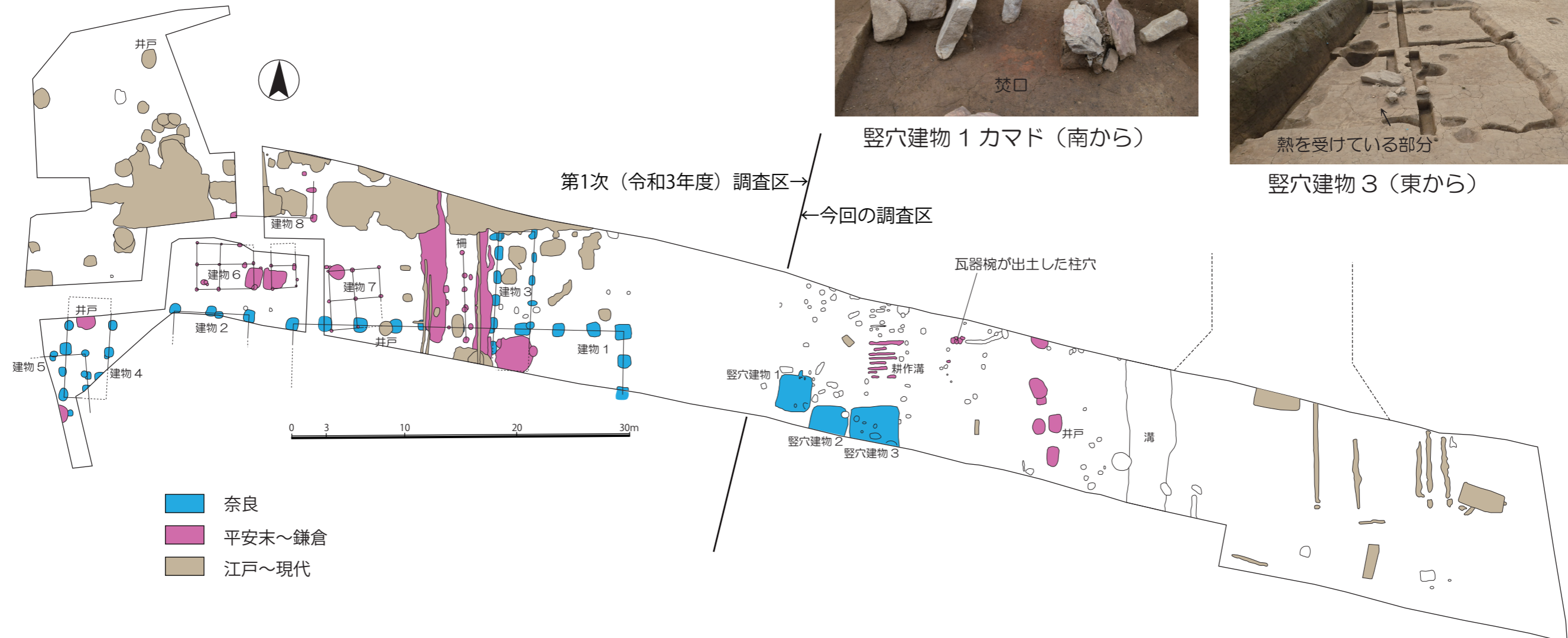
竪穴建物2（北から）



竪穴建物1カマド（南から）



竪穴建物3（東から）



薦生遺跡の遺構